医学と生物学 (Medicine and Biology) Vol. 160 (3): i3_Oj02

[原著]

初めて父親になる人の準備性

デッカー清美

九州看護福祉大学　看護福祉学部

要旨

本研究の目的は、初めて父親になる人の子育ておよび子どもへの思い、準備性の状況や親になることをどのように自己受容しているのかを明らかにすることを目的とした。準備性とは、新しい行動や役割を学習し習得していくために前もって備え態勢を整えておくことである。妊娠期の女性の配偶者である７名の男性を対象にインタビュー調査を実施した。面接は、男性の許可を得て録音しそのデータを逐語録に起こした。作成した逐語録を質的帰納的に分析した結果、【妊娠がわかった時の気持ちの変化】、【親の自覚】、【両親学級参加後の気持ちの変化】、【立ち会い分娩への意欲】、【子どもへの思い】、【夫婦関係の変化】の６カテゴリー、34 サブカテゴリーが抽出された。初めて父親となる人は妻の妊娠がわかって嬉しいと思う気持ちの反面、新しい父親という役割にどう対応していけばよいのかという戸惑う気持ちが確認された。そして、妻や子どもに寄り添い何ができるか、父親になる責任感を真摯に受け止め子育てに協力していこうという思いや、父親としての自己を受容し親役割を習得しようと態勢を整える努力をしていることが示唆された。

キーワード：父親、子育て、準備性、初産

Ⅰ．緒言

今日、核家族化、女性の社会進出、晩婚化や共働き夫婦の増加などによるライフスタイルの変化とともに、出産や子育てが多様化し、妊娠・出産・子育てに関する男性の親役割が見直されるようになってきた[1]。そして、男女とも子育てや介護をしながら働き続けることができる社会を目指して、2009 年に改正育児・介護休業法が施行され、母親に対して短時間勤務制度（1 日原則 6 時間）や所定外労働（残業）が免除された[2]。それとともに、男性の育児休業の取得や父親が子育ての喜びを実感し、子育ての責任を認識しながら、積極的に子育てに関わっていくことが一層求められるようになった[1]。　2010 年に「イクメンプロジェクト」が発足し、それ以降男女共同参画の理念を主とした男性の育児休業取得を促進するなど、父親を対象とした育児支援対策が進められている[3]。しかし、子育ての主な支援は母親が中心で、育児困難感を軽減させるための重要なキーパーソンは父親であるが、はじめて父親になる人の準備の体制は充分とはいえない。父親自身も親移行期の当事者であり、親になる準備や子育てへの準備のための支援は必要である[4]。野町ら[5] は、準備性は新しい行動や役割を学習し習得していくために前もって備え態勢を整えておくことで、課題が明確になり役割過重などの感情や認知をコントロー

連絡先：デッカー清美
〒 865-0062 熊本県玉名市冨尾 888 番地
九州看護福祉大学
TEL/FAX 0968-75-1865
E-mail: k-decker@kyushu-ns.ac.jp

2019 年 12 月 15 日受付
2020 年　2 月 28 日受理

ルする効果があると述べていた。

地域の結びつきの希薄化、父親の子育ての協力が得られにくいなど、母親が孤立感や育児不安を抱え児童虐待が増加している[6]。少子化で兄弟姉妹が少なくなった今日、幼少時から子どもと接する機会が少なく、体験的に子育てを学ぶ機会が減少し「子育て力」が低下傾向にあることが背景にあるという[7]。また、家庭内暴力や家族間のコミュニケーション不足など、従来の母親主体の子育ての在り方が社会的に見直される時期に来ている[8]。母親や父親意識は人が生得的に備えているものではなく、母親も父親も体験によって親意識が芽生え、親になる準備が形成されていく[9]。

親性準備性は、子どもとの関わりの中で育成されていくが、その機会がないと未成熟な親になることが指摘されていた[10]。母親は自らの身体的体験として、胎児や子どもの成長を自覚し母性を育てていくことが可能である。しかし父親は、「視覚、聴覚や触覚等の五感でしか感じ取ることができず、体験が異なることから父親になるという自覚を持つことが困難であり、父親になるという意識が芽生えていない男性が約半数程度いた」と報告されている[11]。また、社会構造の急激な変化で父親役割が多く求められるようになり、モデルとなる父親像がないまま新しい父親役割を求められていることに、困難を感じ育児に焦りを感じている父親の存在がある[12]。

新しい父親の在り方や出産・子育てやライフスタイルが多様化するようになってきた今日、父親である男性について、世話や子育ての担い手としてどのような状況にあるのか捉えていくことは、父親の役割獲得を円滑に進めていくうえで必要である[12]。同時に父親の子育への関与を促していくために、心理的準備状態に限らずどのような行動や身体および子育てへの準備状況にあるのかについて明らかにしていく必要があると考える。ここでいう準備性は、親になるという認識を持って、親役割に必要な資質およびそれが備わった状態や新しい行動や役割を学習し習得しようとする状態として捉えることが出来る[5]。

子育てとは、子どもの生命を守り、心身の発達を助け、健康の増進をはかり、社会に適応できるように育てることで、そこには父親の持つ育児役割意識が大きな影響を及ぼす[13]。少子化や核家族が増加している日本において、父親に対する支援は喫緊の課題である。そこで、本研究では、妊娠期の女性の配偶者で初めて父親になる男性を対象に子育てや子どもへの思い、準備性の状況や親になるということをどのように受け止めているのか父親になる人の準備性を捉えることを目的にインタビュー調査を実施した。このことは、初めて父親になる人への支援の一助につながると考える。

Ⅱ．研究方法

1．対象者および実施期間

研究対象者は、関東地方のＡ県Ｂ市に在住する 20 代半ばから 40 代半ばで、研究の趣旨を理解し、妊娠時期の面接に同意が得られたＫ病院で、出産予定の第１子を妊娠中で正常な妊娠過程にある妻を持ち初めて父親になる男性７名であった。調査期間は、2014 年８月から 2015 年７月であった。

2．調査方法

インタビューガイドを用いたインタビュー調査法によるインタビュー調査を実施した。調査内容は、①妻の妊娠がわかった時の気持ち、②妊娠前後の身体的・心理的変化、③初めて子どもの胎動を自覚した時の体験、④両親学級の参加の有無で、参加し受講した後の気持ちの変化、⑤親になると自覚した時期、⑥子どもへの愛着、⑦母親、父親の役割について期待感と満足度、⑧夫婦関係の変化であった。そして、会話の流れの中で対象者の年齢、職業、学歴、婚姻年数、家族構成などに関する属性も調査した。面接は、研究の内容について熟知し研究協力者として、Ｋ病院に勤務する 10 年以上の助産師経験を持つ助産師１名および研究者１名で、個人を対象として面接時間は約 30 分程度とし、プライバシーが保てる静かな個室で、研究対象者の都合のよい面接時間に合わせて設定した。面接内容は許可を得て、IC レコーダに録音し、録音

内容から逐語録を作成した。

3．分析方法

データ分析方法は、作成した逐語録をもとに質的帰納的方法で行った。分析は逐語録より父親の子育て準備性に関する意識について抽出を試み、意味内容の同質性、異質性に基づきコード化し、コード名をつけて分類・集約し、抽象度を高めたサブカテゴリー名を命名した。さらにサブカテゴリー全体を検討し、共通項をカテゴリー化して抽象度を高めていった。分析の過程で、協力してくれた面接実施助産師１名、母性看護学専門家１名、および看護学研究者３名からスーパーバイズを得ながら、意見の一致が見られるまで検討を繰り返し解釈の信頼性、妥当性の確保に努めた。

4．倫理的配慮

本研究は 2014 年度度首都大学東京研究安全倫理委員会の承認(承認番号 14025)と、国際医療福祉大学研究倫理審査会の承認(承認番号 13-52)を得て開始した。対象者は、協力者である病棟の助産師に正常過程にある初めて妊娠した女性とその配偶者を紹介してもらい、本研究の目的と方法、研究への自由参加および途中辞退の権利、匿名性の保証などプライバシーの保護について口頭で父親に説明し、研究協力の同意を書面にて得た。

Ⅲ. 結　果

1）対象者の概要

研究対象者は７名で年齢は、最高 44 歳、最低 27 歳で、平均±標準偏差値は 33.3±6.2 歳であった。結婚平均年齢は約 31.9 歳、第１子誕生までの結婚期間は、最大 10 年、最小４か月で、平均結婚年数は 2.9±3.4 年であった。学歴は大卒が６名で、専門学校１名、職業は会社員が４名、技術職１名、医療職が１名、教育職１名であった。家族構成は、全員が妻との二人暮らしであった。また、対象者への面接時間は約 30 分から 45 分であった。

2）父親の子育て準備性に関する内容

父親の子育てに関する準備状況について得られたデータを看護学研究者間で繰り返し検討し質的帰納的に分析した結果、以下の６カテゴリー、34 サブカテゴリーが抽出され、カテゴリーは【】、サブカテゴリーを「」で表記する。【妊娠がわかった時の気持ちの変化】:「嬉しさ」「戸惑い」「子どもの発育」「妻が心配」「実感がない」「複雑な気持ち」「責任感の芽生え」「子どもへの不安」、【親の自覚】:「子どもの存在」「忍耐強くなる」「親の覚悟」「親としての戸惑い」「自信」「出産準備」「不思議な気持ち」、【両親学級参加後の気持ちの変化】:「妻に協力」「親になる心構え」「施設見学して安心」「驚きと戸惑い」【立ち会い分娩への意欲】:「喜びの共有」「立ち会い時の支援」「出産の安全・安楽」「出産への不安」、【子どもへの思い】:「胎教」「他の子どもへの興味」「早期の帰宅願望」「子どもへの接し方」「関わり方の願望」「育児休暇」「他人の意見」「子育て支援の活用」、【夫婦関係の変化】:「関係がより親密」「妻を気遣う」「呼び方の変化」であった。なお、各カテゴリーのサブカテゴリーとコードの内訳を表 1-1、表 1-2 に示す。

初めて父親になる人は、妻の妊娠がわかって嬉しいという思いとともに新しく父親の役割が加わることや妻の体や気持ちの変化に戸惑う複雑な思いを持っていた。また、子どもの存在を認識し父親としての責任感や自覚が芽生え始めていた。そして、両親学級へ参加して、妊娠・出産・分娩について知識を得ていくことで、新しい家族の受け入れ態勢を整えようとする姿勢がみられた。

Ⅳ．考　察

1．研究対象者

本研究の研究対象者の年齢は、27 歳から 44 歳で平均年齢 33.3 歳、第１子出生までの結婚期間は、４か月から 10 年で平均結婚期間は２年９か月であった。森田ら[14)]が行った初めて父親になる男性の調査結果では、「対象者である父親の年齢は 27～45 歳、第１子出産までの結婚期間は８か月から 10 年４か月」と同じような対象者が抽出され、同様の結果が得られたことから幅広く対象者が抽出できていることが確認できた。また、父親の７名中、6

名は出産前教室や、妊婦健診に付き添った経験があり、不妊治療をしていた妻を持つ3名の父親は親になることを望む男性で、妊娠、出産、育児に関心が強い男性の集団であることが考えられた。

2．父親になるという意識の変化

妻の妊娠をきっかけに、夫という役割から新たに父親としての役割に対して、嬉しいや戸惑いなどの気持ちの変化が明らかとなった。これは、新しい家族が増えることによる喜びや、生活の変化に対する戸惑いから起こる内発的な感情であることが考えられた。また、妻の妊娠の知らせを夫も一緒に喜ぶという行為は、妻が妊娠を受容し妊娠の喜びを夫婦で共有することは、妻が母親になることへの意識につながることが報告されている[15]。これは夫が父親になることへの意識の変化にもつながるのではないかと考えられた。

父親は子どもの胎動を感じ子どもの存在を確認し親になるということを実感する。また、両親学級に参加して学習することで妊娠・出産の大変さが認識され、もっと妻に協力していこうという思いとともにどのように妻に協力していけばよいのか戸惑う気持ちの変化が確認された。このように妊娠期にいろいろな思いを経験し、両親学級で妻と一緒に出産に関する学習をすることで、父親としての子どもに対する責任感や、親になるという意識が芽生え始めていた。初めて父親になる男性が、さまざまな体験を通じて父親としての自己像を形成していくことや、これらの体験が出産後の夫の育児参加への動機づけになることが示唆されていた[14]。

父親は子どもの胎動を感じて安心し、母親の心身の変化に対して戸惑いながらも心配している様子があった。これは、親となる男性が妻や子どもに寄り添い、父親として何ができるか父親役割行動を真剣に受けとめ、父親としての自分を受容しようと努力している姿であった。また、妻への愛情を再確認し、妻や子どものために夫として父親として協力していこうという意識の変化であると考える。子どもができたことで、夫婦関係が変化し、お互いを思いやる様子やより夫婦関係が親密になったといえる。佐々木[16]は、「夫婦関係が良好であることは、父親の親としての精神的負担および家事・育児の負担感が軽減し父親としての喜びや、自信などの親意識が高められる」と述べており、本研究もこの結果を支持するものであった。夫婦関係が良好であることは、父親としての意識を高め子育て行動につながっていくことが推測された。

3．父親の子育てに対する準備状況

2010年に施行された「イクメンプロジェクト」で父親への子育て支援事業が活発に行われるようになり、新たな父親像が形成されてきているのではないかということが推測された。男性が積極的に育児に関わることが出来るように育児休業が取りやすい環境作りやさまざまなセミナーや支援が企画され[3]、新たな自己の父親像がイメージできるようになってきているのではないかと考えられた。それは、立ち合い分娩や子どもと積極的に関わろうとする父親の姿が確認されたことで明らかになったのではないかと考えられた。そして、夫としてまた父親として出来る限り母親に協力していこうとする心構えが見られ、これは父親の子育て準備性の行動と捉えることが出来る。中島ら[17]は、立ち合い分娩について「父性が向上し父親役割がスムーズに獲得され、育児参加が多くなる」と述べていた。

子どもが出来たことで、より夫婦間件が親密になり、妻を気遣い夫婦喧嘩が少なくなり妻の言動にも耐えていくということは父親としての準備性を習得しようと努力しているのではないかと考えられた。これらより、親となる男性は妻や子どもに寄り添い、父親としての自己を受容しようと努力していることが明らかとなった。佐々木[16]は、夫婦関係が良好であることは、父親の親としての精神的負担および家事育児の負担感が軽減し父親としての喜びや自信を持ち親意識が高められていくと報告していた。本研究もこの結果を支持するものであり、夫婦関係が良いことは子育て準備性を高めることにつながっていくものであると考えられた。このことから、父親が子育て準備性を高められ夫婦関係が良好に保てるような

支援が必要である。そして、妊娠・出産・子育てに関する両親学級や父親のサポートセミナーへの参加を促し、新しい行動や役割を学習し習得できる機会を持てるように支援していくことが重要である。

V．結　語

父親の子育て準備性の思いについて、【妊娠がわかった時の気持ちの変化】【親の自覚】【両親学級参加後の気持ちの変化】【立会分娩への意欲】【子どもへの思い】【夫婦関係の変化】の 6 カテゴリーと 34 のサブカテゴリーが抽出された。親になる男性は父親としての自己を受容しようと努力し、また、夫婦関係が良好な状態であることは父親としての喜びや自信につながり、親意識や親となる準備性が向上していくと考えられた。そして、父親の意識の向上や父親になる人の準備性を充実していくための支援や、妻と一緒に妊娠・出産・育児への思いを共有し行動できる環境を整えていくことが重要である。

（謝辞：本研究にご協力いただいた父親の皆様、研究協力施設のスタッフの皆様、調査に協力してくださいました助産師の須永由華さんに心より感謝申し上げます）
（本研究は、JSPS 科研費 15K01768 の助成を受けたものであり、結果の一部を発表した）
なお、本論文内容に関する利益相反事項はない。

引用文献

1）内閣府.　平成 30 年版　少子化社会対策白書　第 4 節　男女の働き方改革の推進.　2018．92-95.（アクセス：2020 年 1 月 21 日）
2）厚生労働省. 育児・介護休業法. 2009. <http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/0000132020.pdf>　（アクセス：2019 年 10 月 30 日）
3）厚生労働省. イクメンプロジェクト. 2010.　< http://ikumen-project.jp/> (アクセス：2019 年 10 月 30 日)
4）磯山あけみ．勤務助産師が行う父親役割獲得を促す支援とその関連要因．日本助産学会誌．2015．29（2)、p. 230-239.
5）野町磨意、長戸和子．高齢初産婦の家族の準備性に関する文献検討．高知女子大学看護学会誌．2013．39（1)、p.60-68.
6）内閣府．平成 27 年版　少子化社会対策白書．2015．< http://www8.cao.go.jp/2015/27webgaiyoh/html/gb1_s1-1.html>
(アクセス：2019 年 10 月 30 日)
7）小笠原百恵. 親になった男性の「親性」に関する文献研究.　関西看護医療大学紀要．2010. 2（1)、 p.11-22.
8）大元千種. 父親の育児参加とその支援について.　筑紫女学園大学短期大学部紀要．2010．5、p.187-196.
9）三浦小織、加納尚美. 初めて父親になるプロセスに関する研究.　茨城県母性学会．2004．24、p.28-38.
10）宮良淳子、神徳則子．小児看護学学習前の学生が持つ対児感情と親性準備性．中京学院大学看護学紀要．2013．3（1)、p.29-41.
11）田中美紀、布施芳史、高野政子.「父親になった」という父性の自覚に関する研究.　母性衛生．2011、52（1)、p.71-77.
12）宮本知子、藤崎春代 . 日本における乳幼児の子どもをもつ父親研究の動向. 昭和女子大学生活心理研究所紀要. 2008、11、p.57-66.
13）川上あずさ、牛尾禮子. 父親の育児に対する役割意識に関する要因とその支援方略. 小児保健兼研究．2008、p. 496-503.
14）森田亜希子、森恵美、石井邦子. 親となる男性が産後の父親役割行動を考える契機となった妻の妊娠期における体験. 母性衛生．2010、51（2)、p.425-432.
15）中島久美子、常盤洋子．妊娠初期の妻が満足と感じる夫の関わりにおける夫婦の認識．日本助産学会．2011.

25（1)、p.45-56.
16）佐々木裕子. はじめて親となる男性の父親役割適応に影響する要因.　母性衛生.　2009、50(2)、 413－421.
17）中島通子、牛之濱久代. 出産前に参加した夫の立ち合い分娩に対する意識調査.　母性衛生．2006、46（4)、p. 588-597.

表1-1.　父親の子育て準備性に関する意識

カテゴリー	サブカテゴリー	コード	コード（数）
妊娠がわかった時の気持ちの変化	嬉しさ	・子どもできてうれしい	14
	戸惑い	・親になれるか不安と戸惑い	2
	子どもの発育	・子どもが元気に育っているかどうか不安になる	2
	妻が心配	・つわりがひどく苦しそうで心配	4
	実感がない	・こどもができたという漠然とした気持ちとその実感がわかない	2
	複雑な気持ち	・妻がイライラしたり元気がなかったりで気持ちが不安定で複雑な気持ち	3
	責任感の芽生え	・子どもができたことで責任感が芽生えしっかり養っていかなければという気持ち ・周囲からパパと呼ばれ親になる責任感が芽生えた	5
	子どもへの不安	・子どもの胎動がある時は安心だが、胎動がない時は心配で不安	3
親の自覚	子どもの存在	・子どもの胎動を感じる瞬間、存在を感じ親になるという実感 ・胎動を感じて妻のお腹の中で生きていると実感があり安心している。 ・妻のお腹を触り子どもが動いた時に親になるんだと思う	12
	忍耐強くなる	・子どもが存在することで夫婦の喧嘩が少なくなり妻の言動に耐えられる	1
	親の覚悟	・周囲から父親になるのだからしっかりしなさいと言われ、覚悟するようになった	4
	親としての戸惑い	・父親として子どもとうまく暮らしていけるか、どう対応していけばよいのか戸惑う	3
	自信	・夫として父親として、妻が大変な時は家事の手伝いなど協力できるようになった	4
	出産準備	・ベビー用品を妻と買ったり育児本を読んだりして準備している	1
	不思議な気持ち	・子どもの成長を見て、聞いて、触って感じ、子どもの存在に不思議な気持ちになる	7
両親学級参加後の気持ちの変化	妻に協力	・クラスに参加し学ぶことでもっと協力した方がいいという気持ちになる	3
	親になる心構え	・どういう心構えで過ごしたほうがいいか、精神論的なものを聞きたい	3
	施設見学して安心	・病棟を見学できてよかった	1
	驚きと戸惑い	・学級参加後、陣痛から出産までに時間がかなりかかるということがわかり驚きとどのようにその時妻に接したらよいか戸惑う	4

表1-2.　父親の子育て準備性に関する意識

カテゴリー	サブカテゴリー	コード	コード（数）
立ち会い分娩への意欲	喜びの共有	・出産のビデオを見て子どもが生まれる瞬間を妻と喜びをわかち合いたい	1
	立ち会い時の支援	・立ち会い時、妻を支えられるのであれば支えてあげたい	3
	出産の安全・安楽	・妻が苦しんでいる時、楽になるよう何か力になってあげたい	3
	出産への不安	・立ち会う気はあるけど、何をしたらよいかわからず不安	2
子どもへの思い	胎教	・妊娠中腹痛で入院しレントゲンや薬が投与され子どもへの影響について知りたい	1
	他の子どもへの興味	・姉の子どもがかわいいと思い、子どもに興味がわいた	2
	早期の帰宅願望	・一緒の時間を長く取りたくて早く帰宅するようになった	5
	子どもへの接し方	・子どもに対してどう父親と接していったらよいか考える ・子どもへの接し方や教育方法で妻と意見が合わないことがある	6
	関わり方の願望	・妻と協力して一緒に子どもを育てたい ・一緒にいられる時間は長くとって優しい父親になりたい ・お風呂に入れたり、子どもとどこか一緒に出かけたい ・父親と一緒に遊んでくれる子になってほしい	21
	育児休暇	・育児休暇は取りたいけど取るのは難しい	2
	他人の意見	・職場の先輩ママが相談にのってくれアドバイスをもらえる	1
	子育て支援の活用	・助産師訪問などの子育て支援を活用したい	3
夫婦関係の変化	関係がより親密	・妻が妊娠してより仲良くなりマッサージでクリームを塗るなどのスキンシップが増えた	3
	妻を気遣う	・妻の手伝いをすることが多くなった ・階段の上り下りの時、妻の体を気遣うようになった	3
	呼び方の変化	・名前で呼んでいたのが、妊娠がわかってパパという呼び方に変わった	1

The Readiness to be a First-Time Father

Kiyomi Decker

Kyushu University of Nursing and Social Welfare

Summary

The objective of this study is to clarify what the first-time father thinks about child-rearing and children, his readiness to be a parent, and how he accepts himself as a new parent. Readiness means preparing oneself to study and learn new behaviors and roles. We conducted an interview survey of seven men who are the spouses of pregnant women. The interviews were recorded with the permission of the men, and the data was recorded verbatim. As a result, we identified the six categories of "Changes in feeling when pregnancy is known," "Awareness of parents," "Changes in feeling after attending a parenting class," “Desire to be present at childbirth,” “Thoughts about children,” and “Changes in marital relationship,” as well as 34 sub-categories. While first-time fathers were happy to learn of their wife’s pregnancy, they were confused about how to respond to the role of being a new father. It was suggested that they considered what they could do to get closer to their wife and child, took seriously the responsibility of becoming a father, wanted to cooperate in child-rearing, and made the effort to accept themselves as a father and prepared themselves to learn the role of a parent.

Keywords: father, parental care, readiness, first childbirth.